

「ものがたり」の篡奪

宮下 誠

(国学院大学助教授)

祝 辞

記念すべき節目の年に駄文をお送りできることを何より光栄に思います。30周年本当におめでとうございます。僅かな年月とは言え貴学科に籍を置いた日々は、私の決して短いとは言えなくなってしまった来し方にあってもなお、忘れ得ぬ最高の時間のひとつです。衛藤先生、仲嶺先生、松本先生をはじめとした貴学科の先生方のご厚情あってこそ、今の私はある、そう素直に思います。改めてお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

下記は私が現在構想中の音楽論に挿入しようと考えているエッセイの一部ですが、初出は貴誌と言うことになります。別府での日々を僅かな字数で纏めるのは不可能かつ不遜だと思えます。下記はその欠を埋めるでもなくただ書き付けようとする文反故ですが、最近の私の関心の有りようを端的に暴くものでもあると思えます。貴学科から受けた様々な学恩へのほんの僅かな「お返し（利息にもなりません）」のつもりです。宜しくご査収のほど。

20世紀初頭、アルノルト・シェーンベルク以後、より純粹にはアントン・ヴェーベルン以後の音楽の多くは「旋律（ものがたり、ストーリー）」よりも、音そのものの「響き（クラング）」に関心を向けた。この事態をさしあたり「ものがたりの篡奪」と呼んでおこう。この事態に二つのことを重ね合わせてみたい。一つはド・ソシュールの教え、もう一つは「受容美学」の発見、である。

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913年）の慧眼は、ある文化内部で成立している「言語体系」にあつて、個々の単語の「意味」は隣接するそれぞれの「音」との「差異」によってのみ決定される、という「現象」を看破した。即ち単語を構成するそれぞれの「音」は、それに隣接する「音」の存在に徹頭徹尾「他律的に」性格づけられ、こうして組織化されているそれぞれの単語はまた、隣接する単語同士に依つてのみその「意味」が決定される。その「相互他律性の網の目」が「意味」生成の「現場」だと考えたわけである。ひどく大雑把な話だが、例えば「カラス」という「単語」は「カ」と「ラ」と「ス」という三つの「音」の相互差異性によってはじめて「カラス」になるということだ。「カ」は「ラ」に拠って始めて「カ」としての意味を持つわけだ。

一方、受容美学は、ある一定量のテキストには、多かれ少なかれ、「読み手」の介入を前提とした複数の解釈を予感させる「隙間」が存在することをわたしたちに教えてくれた。ポーランドの哲学者ローマン・W・インガルデン（1893-1970年）はこれを「無規定箇所」（『文学的芸術作品』）と呼び、ドイツの英文学者ヴォルフガング・イーザー（1926-）はこれを「空所」（『行為としての読書』）と呼んでいる。この、テキストに仕掛けられた「無規定箇所」乃至「空所」の存在によってわたしたち「読み手」は「今読みつつある」テキストに能動的に関与することを強えられる。イーザーに拠ればジェームス・ジョイス（1882-1941）の『ユリシーズ』（1914-1922年）よりも前の文学テキストの場合（例えば、チャールズ・ディッケンズ）、この「空所」は明らかにその後の展開を読者に一義的に類推させる。勿論「他の可能性」も「空所」に於いてはあり得るのだが、「空所」以降の「ものがたり」の展開は、概ね読者の予想通りに進行する。読者はこうして「空所」によって投げ掛けられた「複数の解釈可能性」によってほんの一瞬の躊躇を余儀なくされながら、「予想通りの展開」を前に、鼓舞、解放され、より深くテキスト内部へと誘われるのである。ところがジョイスの作品では、テキストに仕掛けられた「空所」が読者の「期待の地平」を何らかのかたちで常に裏切るため、読者は方向性を見失い、テキストそのものに深い懐疑を抱かざるを得ず、勝れて反省的な姿勢を採るよう強要される。こうして読者はテキストという「ものがたり」に裏切られながら、ついには「世界」という、わたしたち自身を圍繞する「外部（ものがたり）」、更には

その「世界（ものがたり）」に包摂される「わたしたち」自身をも「解釈保留」の境涯へと投げ返さざるを得なくなる。

以上、ごく乱暴に纏めた二つの「認識」は、20世紀が、「文学」、「音楽」、「美術」といった芸術分野、或いはごく大雑把に文化一般にもたらした、「ものがたり（ストーリー／意味）の篡奪」という「現象」に寄り添ってはいないだろうか？20世紀、文学の分野に於いては「ものがたり」がパロディックに転回され、或いは「意味の連鎖」が所々で「脱臼」させられ、「音楽」の分野では「メロディ」という「ものがたり（ストーリー／意味）」が解体され、一つ一つの「音」或いは垂直方向にモナド化された音の塊（「響き（クラング）」）に、より重要な役割が「割り振られ」、「美術」の分野では「歴史画（ヒストリー＝ストーリー）」が解体され、印象派の台頭によって「現象の分析」が、抽象の成立によって「絵画構成要素の自律」が、促されて行った。これらに共通するのは19世紀的なパラダイムに於ける「意味（ものがたり、ストーリー）」の「解体」であり、「脱臼」であろう。ド・ソシュールの慧眼はこれらに共通する現象、即ち「意味の篡奪」を直観し、受容美学は同じものを理論的に説明しようとしたものなのではなかろうか。

貴学科の更なる発展を心より祈念しつつ、